

平成 6 年度

開かれた学校づくりと子どもたち

——子どもたちが存在感のある学校生活を送るために——

開かれた学校づくりと子どもたち

——子どもたちが存在感のある学校生活を送るために——

児童生徒指導研究会議

青木 幸夫¹ 山村 藤子² 伊関 秀男³ 沢木 光雄⁴ 萩原 優⁵

要 約

近年、児童・生徒指導上の問題は多岐にわたり、その解決のための学校と家庭・地域社会との連携の大切さも叫ばれて久しい。その中で学校は、様々な地域活動や学校独自の活動を通して、その問題の解決にあたってきた。しかし、その活動の多くは学校教育の困難点の解決のための活動、いわば「学校サイド」の必要性からのものであったように思われる。そこで本研究会議では、児童・生徒の学校生活に目を向け、「児童生徒サイド」から問題解決に取り組もうとした。「児童・生徒の一人一人が真に存在感を感じて活動しているか」を問い直すことを研究の柱としたのである。

市内の小・中14校の児童・生徒1,600余名の存在意識の実態調査と、その結果の分析・考察を中心に進めた結果、学校生活における「愛他的行動意識」の高さや「自己表現意識」の高さが、他の行動意識、すなわち、学級内の交友意識や技能教科に対する意識とも強い関連を持っており、学校生活における存在意識の高いことを知った。そして、そのみならず、「愛他的行動意識」や「自己表現意識」の高い児童・生徒群は、家庭内の人間関係、地域・近隣の人々との人間関係、学習塾や習いごと塾での生活等においても良好な状況（存在意識の高い状況）にあることがわかった。

「愛他的行動意識」とは、他者への援助的な行動を通して自己の存在感を求めようとする意識である。また、「自己表現意識」とは自己表現（自己主張）や学習への適応を通して、自己の存在感を感じようとする意識である。学校生活における日常的な指導の中で、個々の状況に照らして、この愛他的行動意識や自己表現意識をどう援助し育てていくかが、学校内外における子どもたちの“育ち”に大きく関わるであろう。

キーワード：児童生徒指導、学校経営、地域社会教育、存在感、愛他的行動意識、自己表現意識

目 次

はじめに	
I 主題設定の理由	114
II 研究の方法	114
1. 仮説とその設定理由	114
2. 研究の方法	114
III 分析結果	116
A 存在感を構成する因子	116
1. 抽出された7つの因子	116
2. 2つの主要因子	118
3. 愛他的行動意識群・自己表現意識群・ 学級内交友意識群の関連	119
B 存在感を構成する因子の意義	121
1. 愛他的行動意識と他領域との関連 《学校生活》	122
2. 愛他的行動意識と他領域との関連 《家庭・地域生活》	122
3. 自己表現意識と他領域との関連 《学校生活》	124
4. 自己表現意識と他領域との関連 《家庭・地域生活》	126
IV 研究のまとめと課題	127
おわりに	
先行研究・参考文献・指導助言者	

¹川崎市立西高津中学校教諭（主任研修員）

²川崎市立幸町小学校教諭（研修員）

³川崎市立中野島小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立渡田中学校教諭（研修員）

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

はじめに

近年、児童・生徒指導上の問題は多岐にわたり、その解決のためには、学校現場と家庭、地域社会との連携が欠かせないと言われ続けている。それを受けて学校・家庭・地域の連携活動はさまざまに展開されている。川崎市でも「地域教育会議」が提唱され、その運動は全行政区、全中学校区に広がりつつある。

学校はこれまでも、青少年地域活動促進委員会や学校独自の活動を通して、家庭・地域との連携の中心的な役割を果たしてきた。しかし、これは学校教育の困難点の解決のために、家庭・地域の理解と協力を求めるといった「学校サイド」の必要性から発した活動が中心であったように思われるのである。

また、学校では、家庭との相互協力についての議論が深められ、実践に熱を入れてはいるものの、地域社会や社会教育施設・事業等への関心は決して高くなく、地域社会が子どもたちの“育ち”を支えている側面に対しては、十分な理解を示していないとも思われるのである。

学校教育に携わる者としては、生涯学習という視野の中で自らの足元を見つめ直し、子どもたちの育ちを支える学校の役割を問い直すことによって、彼らの生き生きとした学校生活を保証しなければならない。

I 主題設定の理由

開かれた学校づくりと子どもたち
子どもたちが存在感のある学校生活を送るために

学校教育にあたるものは、社会教育や家庭教育に対して独立した役割を担うものとして、その機能を捉えてきた。しかし、子どもの“育ち”を学校外での生活も含めて見る時、学校という集団社会の中で求められる児童・生徒像に、地域社会で活動する子ども像を重ね、各々の果たすべき役割について配慮されなければならないのは当然であろう。

私たちは「開かれた学校づくりと子どもたち」という研究主題を掲げた。「開かれた学校」とは、学校の持つ人材をも含めたハード面・ソフト面での教育機能を外に向けて共に、社会において生き生きと活動できる人材を送り出す場としての機能を合わせ持つものでなければならない。学校と家庭・地域社会が有機的に機能することが、生涯学習の充実に欠かせないと言えよう。

この主題に対して、本研究会議では、「学校が生き生きとした社会生活を送る子どもたちを育てる」というこ

とに焦点をあてて研究を進めることにした。副題を「子どもたちが存在感のある学校生活を送るために」として様々な生活場面における存在感の有り様を捉え、学校として、どのように支援していくことが、子どもたちの生き生きとした生活につながっていくのかを、児童・生徒の存在意識調査をもとに探ろうとしたのである。

II 研究の方法

1. 仮説とその設定理由

本研究会議では、「開かれた学校づくりと子どもたち」という主題の下で、

存在感のある学校生活を送る子どもたちは、学校外の生活場面においても存在感を感じて、積極的に過ごしている

という仮説を立てた。

学校では活動の場を見出すことができず、「こども文化センター」や、近所に住む年少の子どもたちとの活動（遊び）の中に生きがいを見出している子どももいるし、家庭では生き生きとしている子どももいる。しかし、子どもたちにとって極めて重要な活動の場である学校で存在感を感じている児童・生徒は、行動力や判断力・社会性を伸ばし、その活力が家庭生活や社会生活にも一層の存在感をもたらすのではないかと考えるのである。そして、学校の果たす役割の一つとして「児童・生徒に、いかに存在感のある学校生活を送らせることができるか」ということがあるのではないとも考える。

私たちは、上記の仮説をもとに、学校生活における子どもの存在意識を4つのカテゴリーに分けて調査し、あわせて、学校外についての存在意識の実態も調査することとした。学校における子どもの存在意識の状況との対比を進め、存在感ある学校生活を支える指導のあり方についての手がかりをつかもうとするものである。

2. 研究の方法

(1) 「存在感」の定義

「存在感」について、本研究会議では

「一員としてそこにいる、自分も仲間のひとりである、他者から認められている状態」

として定義し、子どもたちが学校生活の中で存在感を感じる場面について、具体的に次のような14のカテゴリーを想定した。(順不同)

A	人に好かれていると感じる状態	愛情欲求
B	人に認められている(期待されている)と感じる状態	社会的承認欲求
C	よくできたと感じる状態	成就の欲求
D	仲間であると感じる状態	所属欲求
E	人の言葉に左右されず判断行動ができると感じる状態	独立欲求・自立性
F	自分から進んでやろうとすると感じる状態	自主性
G	学習内容がよく理解できると感じる状態	知的達成能力
H	目標に合わせた体の動きができると感じる状態	身体的達成能力
I	現象を正しく理解できると感じる状態	認知能力
J	自分の力に合った活動ができると感じる状態	要求水準
K	いろいろなことをやってみたいと思う気持ちがあると感じる状態	新経験の欲求
L	自分なりの態度をもって乗り組みたいと感じる状態	やりがい感
M	人よりできると感じる状態	優越感・達成能力
N	自分の気持ちをコントロールできると感じる状態	自律性

これらA～Nにあげた状態が一定の割合で満たされることが「存在感を感じる状態」と考え、これらのカテゴリーに対応させた質問を設定して、小・中学生の「存在意識の実態」を調査によって明らかにすることとした。

(2) 調査の構造

「存在意識の実態」を明らかにするうえで、本研究会議では子どもたちの主な活動場面を、

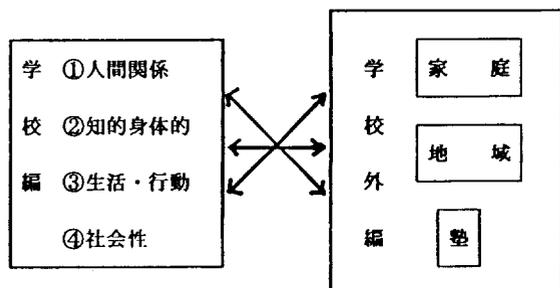
- ① 学校生活
- ② 家庭を中心とした生活
- ③ 地域での活動(子ども会・町内会・子ども文化センターなど)
- ④ 学習塾や習いごと塾での生活

の4つに絞った。現代の子どもにとって塾の存在や塾での生活は重いウェイトを占めるとの判断から④を設定した。本研究の主題からして、①の学校生活を中心としてきめ細かな調査をすることが必然となる。そこで、学校生活に関して次の4領域を設定した。()内には、上記の存在感に関する14のカテゴリーA～Nとの関わりを示す。

- 1 「学校内の人間関係」
(上記のカテゴリーA・B・Dが該当する)
- 2 「知的、身体的学習能力」
(C・G・H・J・Mが該当する)
- 3 「性格、行動の傾向(個性)」
(E・F・K・Lが該当する)
- 4 「社会性」(N・Iが該当する)

これらを学校編とし、学校における存在感と学校外編(家庭・地域・塾)との関連を検討して、前述の「仮説」を立証しようとするものである。

図1



(3) 研究方法

① 調査対象

ア 地域特性等を配慮し、市内7行政区から公立小学校・中学校各1校を抽出した。小学校については抽出中学校区内の小中学校とした。

イ 小学校は5・6年生各2学級、中学生は全学年各1学級を調査対象とした。(約1,700名)

② 分析方法

ア 因子分析—多数の観測変数を、共通因子と呼ばれる共通の潜在変数の線型結合を用いて集約的に説明する解析方法。

イ 主成分分析—多数の量的変数の合成により少数の総合変数を作る。因子分析による因子抽出の確認のために用いる。

ウ 因子分析によって抽出された因子ごとに尺度得点化(単純合成得点)し、属性および他因子間との関連を探る。

③ 調査票の構成・調査方法

○調査票の構成

計74問(属性を除く)

調査項目の柱	主な調査内容	質問法	設問数
属性	性別・学年別		2
学校での生活	・学校内の人間関係(10問) ・知的・身体的学習能力(8問) ・性格・行動の傾向(8問) ・社会性(6問)	3件法 及び 5件法	32
家庭での生活	・家族との人間関係(8問) ・近所の大人や子供との関わり(5問)	3件法	13
地域での活動	・地域の人々との関わり ・子ども会との関わり ・町内会活動について ・子ども文化センターについて	3件法	18
学習塾・習い事 塾での生活	・塾での人間関係 ・塾での学習 ・塾に対する気持ち	3件法	11

※設問用紙の添付は省略。設問内容についてはP116～P118の表を参照されたい。

○調査方法

- ・調査形式：自記式質問紙法(選択式)
- ・調査期間：平成6年2月9日～28日
- ・抽出された調査対象

- ◇川崎市立小学校
各区1校 7校 30学級 924名
- ◇川崎市立中学校
各区1校 7校 21学級 713名

計14校 51学級1,637名

表1 学年別・性別一覧

	小5	小6	中1	中2	中3	合計
男	249人 23.1%	238人 22.4%	126人 11.7%	115人 10.6%	120人 11.1%	513人 47.3%
女	229人 21.3%	217人 20.2%	108人 10.0%	120人 11.1%	119人 11.0%	493人 45.7%
合計	478人 44.4%	455人 42.6%	234人 21.7%	235人 21.8%	239人 22.1%	1,637人 151.3%

なお、全設問について、過半数を超える設問に対して「どちらともいえない」「わからない」と答えているものは、正確なサンプルとはなり得ないと判断し、集計・分析の対象から排除した。以下の図表における対象数が全回収人数1,637名でなく、1,447名となっているのは、そのためである。

表2 学校生活領域(26項目)での因子分析結果(小学生:924人 主因子解後エカマックス回転)

(1)

設問項目	因子1	共通性
☆ V29 クラスのこの前立って意見を言うことができるか	.60391	.500
☆☆ V27 教科書に書いてある内容がわからないことがあるか	-.51187	.272
V15 クラスの話し合いで自分の意見が言えるか	.47710	.343
V02 学級委員や係立候補したら選ばれると思うか	.46853	.281
V07 自分の考えを整理して文章を書くことが得意か	.46006	.259
☆ V28 学校の勉強でクラスの子より得意なものがあるか	.45444	.380
☆ V26 学校では先生にほめられることが多いか	.44040	.299
V09 楽器の演奏など短い練習時間で上手にできるほうか	.40627	.207
☆ V30 勉強でわからないことがあったらわかるよう努力するか	.37839	.273
☆ V31 先生の前でよくわからないことがあったら先生に質問するか	.36846	.223
★ V17 クラスやクラブ(部)などで責任者になって活動するのはいやか	-.33177	.178

(2)

設問項目	因子2	共通性
☆ V23 遠足の裏で誰か一人の裏を作る友達がいるか	.69642	.529
☆ V24 宿題が解けなくて困った時クラスに相談でき友達がいるか	.53026	.348
V03 休み時間「遊ぼうよ」と声をかけたクラスの子は集まってくるか	.48229	.296
☆ V25 教科書をおねた見せてくれる子がクラスにいるか	.46859	.283
★ V06 休み時間教室や校庭で一人ぼっちで過ごすことがあるか	-.41186	.178

(3)

設問項目	因子3	共通性
☆☆ V01 クラスで学校を休んだ子がいたら「どうしたんだろう」と心配するか	.54937	.349
☆☆ V32 クラスで仲間外れやつまらなそうしている子がいても気にしないか	-.54210	.315
V05 クラスの子のくつがなくなったら一緒に探してあげるか	.45998	.214
V16 クラスで係をする時いろいろの係をやってみたいと思うか	.42207	.239
V18 クラスの子に悪いことを言ってしまったと気がいたら素直に謝れるか	.40382	.205
V04 運動会でクラスの子が休まずに出場したら声援をおくるか	.38059	.179

(4)

設問項目	因子4	共通性
V08 体育の時間いろいろ運動を遊んでやりたいと思うか	.64452	.465
V11 他の子ができない運動でも簡単にできてしまうことがあるか	.48427	.269
V10 園工(美術・技術家庭科)の時間道具を上手に使えるか	.39612	.188
V12 体育の時間試合でチームが勝ったら自分がたからだと思うか	.34814	.213

☆印は5件法、他は3件法による ★印は「反転質問」

III 分析結果

A 存在感を構成する因子

1. 抽出された7つの因子

基本集計後、3生活領域(学校・家庭・地域)の因子分析により、下記の因子が浮かび上がった。

学校生活領域の小・中学生別因子分析では4因子が抽出された。各因子を構成する設問内容をもとに因子名をつけた。ここでは、共通性・因子負荷量の低い項目を除いた26項目について、小学生を対象とした因子分析結果をもとに因子構造を示す。(表2)

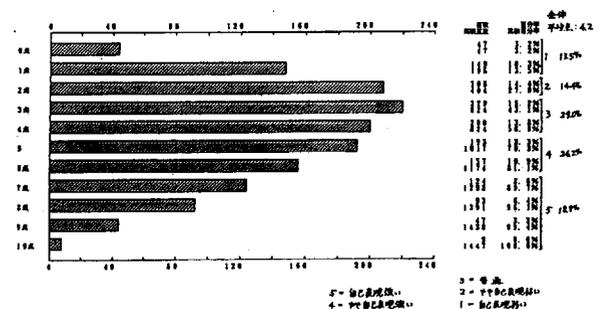
また、因子負荷量0.3以上の項目を、各因子を構成する項目とし、これらの項目の単純合成得点を各因子の尺度得点とした。なお、得点化にあたって、「はい」「ええ」「とても・やや」を1点としたので、尺度得点は「はい」あるいは「とても・やや」として該当した項目数そのものである。

(1) 自己表現意識群：学校生活における自己表現(自己主張)や学習への適応を通して、自己の存在を感じようとする子ども群に関わる因子。

※V29, V27, V15等を含む因子群

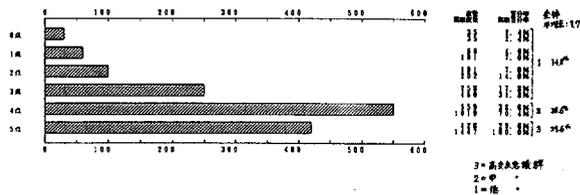
「自己表現意識群」の因子には、自己表現(自己主張)意識を表す設問の他に、教科学習の適応力に関わると思われる設問も含まれている。平均点は4.2であり高得点群が比較的少なく、「はい」「いいえ」が様々な分布している。

図2 自己表現意識群のヒストグラム



(2) 学級内交友意識群：級友と協調的に行動することによって、存在感を得ようとする子ども群であり、特に人間関係に関する学級経営の在り方が大きな影響を与えていると思われる。個人の複数他者への関わりを表すものと言えよう。

図3 学級内交友意識群のヒストグラム

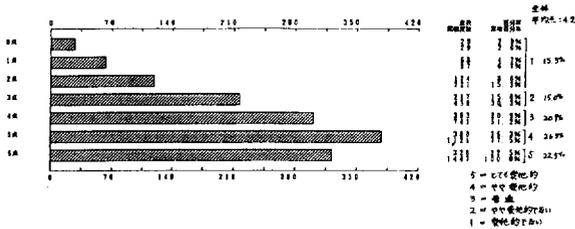


設問番号のV23・V24・V25・V03・V06が関わる。設問数が5問なので5点満点のヒストグラムができる。分布は高得点に集中しており学級内の交友関係に存在の場を求める児童・生徒の多いことを顕著に示している。

(3) 愛他的行動意識群：学校生活において他者への愛他的行動（援助的行動）を通して自己の存在感を求めようとする、人間関係に関わる因子。

※V01, V32, V05等を含む因子群

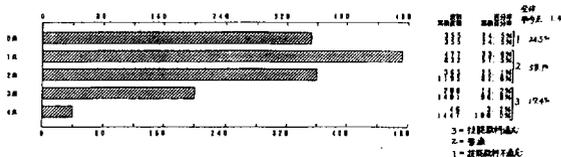
図4 愛他的行動意識群のヒストグラム



「愛他的行動意識」の全対象者の平均は4.2点であった。満点も多く、学校内の人間関係の中に自己存在の拠り所を求める子どもたちの意識がうかがえ、他者に対して援助的に接しようとする子どもが多いと言えよう。

(4) 技能教科意識群：技能を伴う教科学習の中で存在感を確認しようとする子ども群。

図5 技能教科意識群のヒストグラム



平均は1.4点。技能的な教科の学習場面において自己の存在を意識できる児童・生徒が決して多くないことを示していると考えられる。特に中学生がやや低

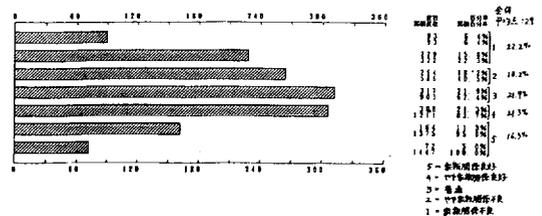
く、小学生の平均1.5点に対して1.2点となる。

(5) 家族関係意識群：家族との人間関係の中で自己の存在感を得ようとする意識する子ども群。

以下の項目が因子を構成する。

- V37 家族はあなたの話や意見をよく聞いてくれますか
- V42 家族からほめられることが多いですか
- V35 もし家族が病気をしたら、あなたは看病しますか
- V38 家族はあなたの将来について、よく考えてくれていると思いますか
- V34 帰宅時間が予定より遅れてしまったら家族は心配すると思いますか
- V41 手伝いを頼まれたら、家族のためなら何でも手伝おうと思いますか

図6 家族関係意識群のヒストグラム



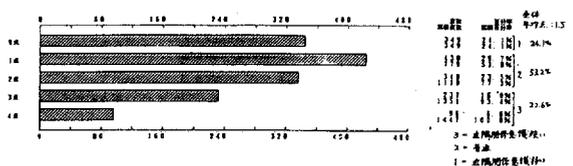
正常分布に近い形である。平均2.9点であるが、児童・生徒の意識にばらつきがあると思われる。他の分析資料により、中2をはじめ中学生がやや低く、男子群もやや低い結果となっていることが確認されるが、中学生の「独立」に向かう発達段階からすれば当然かもしれない。

(6) 近隣関係意識群：近隣の大人、子どもとの人間関係を通して存在感を得ようとする子ども群。

以下の項目が因子を構成する。

- V43 近所の大人からほめられることが多いですか
- V45 あなたは近所の子どもの世話をしてあげることがありますか
- V40 近所で遊んでいる幼い子を見た時、かわいいなと思いますか
- V42 家族からほめられることが多いですか

図7 近隣関係意識群のヒストグラム



ここには大人対象の設問と、子ども対象の設問の両

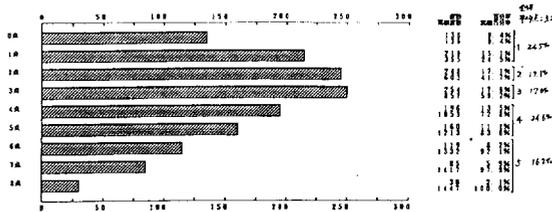
方が入っており、どちらを対象とするかによってその反応には当然差異があった。平均は1.5点、小学生の平均点1.8に対して、中学生は1.2と低くなっている。女子と比較して男子がかなり低いことも、他のデータから明らかとなった。

(7) 地域存在関心群：地域に対する関わりの中で存在感を得ようとする子ども群。

以下の項目が因子を構成する。

- V58 学校の勉強だけでなく町内会や子供会などの活動も大切だと思いますか
- V46 地域活動などを通して地域の人たちと知り合いたいと思いますか
- V54 親子運動会や町内運動会に参加することは楽しいことだと思いますか
- V53 町内会で近くの道路の大掃除をしたら手伝いますか
- V47 子供会指導等に熱心な大人を見て自分もそのようになりたいと思いますか
- V51 同じ活動グループに気の合わない子がいても地域活動に参加しますか
- V50 近所に新しい図書館や市民館ができれば行ってみたいと思いますか
- V60 町のお年寄りと一緒にやってみたい活動がありますか

図8 地域存在関心群のヒストグラム



「はい」「いいえ」のばらつきが大きく、平均も3.2点と低い。「地域への関心」についても学年差・男女差が大きく、特に学年差は小学生の平均3.7に対して中学生は2.5点となっており、地域への関心の低さがうかがわれる。

2. 2つの主要因子（愛他的行動意識群・自己表現意識群）の学年別・男女別に見た特徴

1で示した7因子のうち、ここでは2つの因子、すなわち愛他的行動意識群・自己表現意識群について、その学年別・男女別特徴を見る。この2因子こそが、学校生活における児童・生徒の存在感の有り様にもっとも深く関わる因子であろうとの判断からである。

(1) 愛他的行動意識群

愛他的行動意識群を小・中学生別に示したものが図9・10である。

図9 愛他的行動意識群ヒストグラム（小学生）

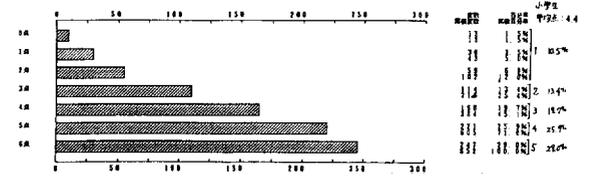
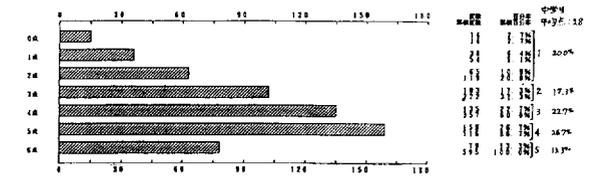


図10 愛他的行動意識群ヒストグラム（中学生）



これを、学年別・男女別にその割合を数値で示した表が下の（表3）（表4）である。

表3 愛他的行動意識群（対全学年別）

	小5	小6	中1	中2	中3	合計
高愛他群	4.9人 53.2%	9.9人 31.9%	3.0人 27.3%	2.1人 19.6%	2.0人 18.2%	32.7人 30.0%
中愛他群	7.3人 77.3%	31.7人 100.0%	4.2人 38.2%	4.4人 40.0%	4.0人 36.4%	51.6人 48.3%
低愛他群	4.4人 46.4%	5.8人 18.3%	3.7人 33.5%	3.3人 30.0%	3.8人 34.5%	26.0人 24.7%
合計	37.6人 35.5%	47.4人 44.9%	11.9人 11.2%	13.8人 12.9%	13.6人 12.7%	126.3人 119.2%

カイ二乗値 71.32700 自由度 8 標準 0.01%

表4 愛他的行動意識群（対全性別）

	男	女	合計
高愛他群	11.4人 25.2%	21.2人 46.3%	32.6人 38.4%
中愛他群	16.9人 37.4%	13.4人 29.4%	30.3人 35.6%
低愛他群	7.6人 16.9%	5.8人 12.7%	13.4人 15.8%
合計	35.9人 79.5%	40.2人 88.8%	76.1人 89.5%

カイ二乗値 92.38649 自由度 2 標準 0.01%

これらから明らかのように、愛他的行動意識群では、学年差・男女差が顕著であった。「高愛他群」が小学5年生全体の55.8%、6年生の39.3%に対して（小学生全体では47.8%）中3で22.6%、中学生全体でも23.7%に過ぎない。一方「低愛他群」は小5の16.6%に対して中3で35.7%と倍増する（小学生全体では19.7%、中学生全体では35.7%）。また、女子全体の「高愛他群」53.3%に対して、男子全体では25.2%と半減する。

ただ、小・中学生の差、男女の差をそのまま鵜呑みにすることはできない。なぜなら、小学生においては教師の指導を絶対的なものとして捉え「そうだろう」とする姿勢、理想に向かう姿勢で回答する傾向が強くなり、一方、中学生は「あるべき姿」と「自分の現実」

をより厳しく見つめる中で葛藤する傾向が強いと考えられるからである。また、女子は男子に比べて「規範意識」が強く、その姿勢に基づいて回答する傾向が強いと思われるからである。

なお、(表5)でも明らかなように、中学生を男女別に見ると、「高愛他群」が男子で11.8%であり女子の39.0%の約4分の1に過ぎない。

表5 愛他的行動意識群(対性別：中学生)

	男	女	合計
高愛他群	71.2% 22人	39.0% 57人	23.7% 79人
中愛他群	50.7% 76人	48.4% 71人	49.5% 147人
低愛他群	77.8% 89人	28.5% 39人	35.1% 128人
合計	56.7% 107人	43.4% 89人	100.0% 196人

カイ二乗値 42.49532 自由度 2 確率 0.01%

(2) 自己表現意識群

上記(1)と同様に「自己表現意識群」を小・中学校に示したものが(図11)(図12)である。

図11 自己表現意識群ヒストグラム(小学生)

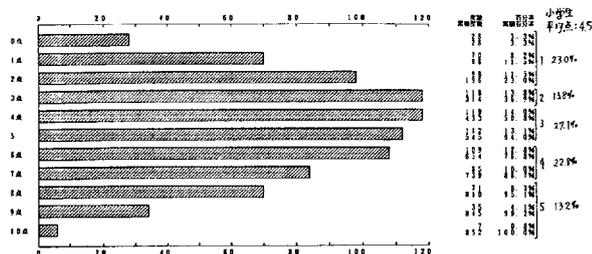
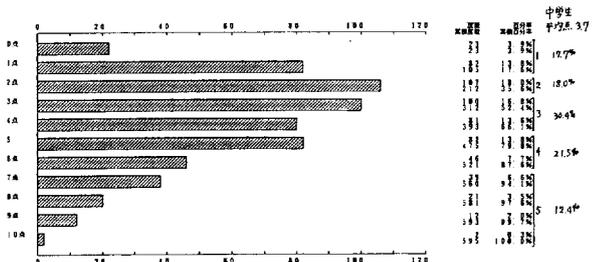


図12 自己表現意識群ヒストグラム(中学生)



これを、学年別・性別にその割合を数値で示した表が下の(表6)(表7)である。

表6 自己表現意識群(対全学年別)

	小5	小6	中1	中2	中3	合計
高自己表現群	38.0% 5人	34.3% 5人	18.3% 3人	23.7% 4人	19.2% 3人	38.7% 20人
中自己表現群	23.7% 4人	28.6% 4人	29.7% 5人	18.3% 3人	18.6% 3人	42.0% 23人
低自己表現群	27.2% 4人	27.0% 4人	24.3% 4人	32.9% 5人	30.7% 5人	22.9% 13人
合計	38.0% 5人	29.6% 4人	18.1% 3人	14.4% 2人	14.2% 2人	100.0% 13人

カイ二乗値 37.53523 自由度 8 確率 0.01%

表7 自己表現意識群(対全性別)

	男	女	合計
高自己表現群	52.9% 13人	49.5% 13人	30.7% 27人
中自己表現群	54.7% 19人	47.5% 20人	42.0% 29人
低自己表現群	53.1% 17人	45.4% 19人	22.9% 16人
合計	52.2% 44人	47.8% 42人	100.0% 86人

カイ二乗値 0.74799 自由度 2 確率 68.80%

ヒストグラムに現れている平均点に注目すると、全学年の平均が4.2点、小学生の平均が4.5点、中学生が3.7点だった。その差がグラフには明確に出ており、小学生が正常分布に近い。全体像として表6を見ると「高自己表現群」は全学年で対象数889人の30.7%、小学5・6年生の合計では37.4%であるのに対し、中学生全体では20.8%に過ぎず約2分の1である。一方「低自己表現群」は小5で17.2%、中3で31.5%となり倍増に近い。逆転現象である。

愛他的行動意識群では「高愛他群」が全対象数850人の38.4%であった(表3)のに対比して見ても、「高自己表現群」の30.7%はやや低い。自己表現意識傾向は、低学年において高く、学年が上がるにしたがって低くなっていく特徴を持つと言えよう。なお、この「自己表現意識群」には、学習適応意識という側面が含まれていることも付加しておく。因子を構成する設問のV07・V27・V28等にそのニュアンスが含まれており、学習に対する不適応感が数値に影響を与えているものと考えられる。

学年差は顕著であったが、反面、(表7)で明らかなように、男女差がほとんど見られないのも、この「自己表現意識群」の特徴と言えよう。

3. 愛他的行動意識・自己表現意識・学級内交友意識の関連

前項で示した2つの主要因子(愛他的行動意識群と自己表現意識群)の特徴を念頭におきながら、さらに学校生活に関わるもう一つの因子「学級内交友意識群」との関連を見てみよう。

表8 愛他的行動意識群：自己表現意識群(全学年)

	高自己表現群	中自己表現群	低自己表現群	合計
高愛他群	49.8% 60.1%	39.7% 34.5%	17.2% 17.1%	38.9% 38.2%
中愛他群	26.0% 27.0%	46.7% 34.5%	27.4% 35.7%	31.6% 34.4%
低愛他群	12.4% 12.9%	46.7% 31.0%	39.0% 47.3%	25.3% 28.4%
合計	16.3% 31.3%	22.9% 44.8%	24.9% 28.8%	100.0% 100.0%

カイ二乗値 68.03069 自由度 4 確率 0.01%

表を左上から右下に向かって対角線上に見ると、愛他的・自己表現ともに高得点の者（両方に「はい」と答えた者）は全対象者521人中98人（18.8%）であり、いずれも低得点の者は61人（11.7%）となる。

同様に小学生，中学生の傾向を見てみよう。

表9 愛他的行動意識群：自己表現意識群（小学生）

	高自己表現群	中自己表現群	低自己表現群	合計
高愛他群	52人 72.3%	63人 45.7%	14人 10.9%	129人 47.1%
中愛他群	14人 19.4%	55人 39.8%	23人 17.0%	92人 33.6%
低愛他群	6人 8.3%	20人 14.5%	27人 19.8%	53人 19.3%
合計	72人 26.3%	98人 35.4%	64人 23.4%	274人 100.0%

表10 愛他的行動意識群：自己表現意識群（中学生）

	高自己表現群	中自己表現群	低自己表現群	合計
高愛他群	12人 32.4%	24人 34.7%	8人 11.3%	44人 60.1%
中愛他群	14人 37.7%	32人 45.2%	23人 31.5%	69人 94.1%
低愛他群	11人 29.0%	41人 57.1%	34人 46.3%	86人 116.4%
合計	37人 18.6%	97人 48.7%	65人 32.7%	199人 100.0%

小学生を対角線上に追うと、全学年の傾向とほぼ近似しているが、「愛他的でなく、自己表現意識も低い」者は、いずれも高い者の半数に過ぎない。それに比べて（表10）の中学生では、逆に右下に向かうと数値が倍増する。すなわち、愛他的行動意識が低く、自己表現意識も低い生徒が多いことがわかる。ただし、中学生の発達段階からすると、小学生の「単線的」傾向に対して、中学生が存在感を感じ存在感を示す幅はより広いと思われる。従順であろうとする自己と反発的な自己との間で揺れる中学生の特徴が、低い数値となって現れているとも考えられ、一概に中学生の愛他的行動意識や自己表現意識が低いとは断定できないと考える。

同様にして下の（表11）では愛他的行動意識群と学級内交友意識群の全学年の関連を見た。「高愛他群」かつ「高交友意識群」のグループから、右下の「低愛他群」「低交友意識群」のグループまでの人数の動きには大差がない。

同様に下表12の小学生を見ると、人数が半減する。学級内人間関係意識がとても高く、その人間関係の中に自己の存在感を求めようとする傾向が顕著であることがうかがえるが、下表13に見られるように、中学生においては高愛他・高交友グループの数値が低い。

表11 愛他的行動意識群：学級内交友意識群（全学年）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高愛他群	28人 39.3%	32人 40.5%	66人 23.2%	126人 38.4%
中愛他群	83人 54.9%	116人 38.9%	109人 38.2%	308人 30.6%
低愛他群	27人 11.3%	84人 38.7%	110人 49.8%	221人 22.0%
合計	138人 28.0%	232人 38.5%	285人 33.5%	655人 100.0%

カイ二乗値 70.18636 自由度 4 確率 0.01%

表12 愛他的行動意識群：学級内交友意識群（小学生）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高愛他群	99人 42.7%	95人 32.5%	53人 21.8%	247人 47.8%
中愛他群	47人 28.9%	55人 38.4%	68人 39.7%	168人 32.5%
低愛他群	12人 17.8%	31人 44.1%	59人 83.1%	102人 19.7%
合計	158人 30.6%	181人 35.0%	178人 34.4%	517人 100.0%

表13 愛他的行動意識群：学級内交友意識群（中学生）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高愛他群	29人 36.7%	37人 48.8%	13人 16.5%	79人 23.7%
中愛他群	36人 45.0%	56人 38.4%	43人 40.2%	135人 40.5%
低愛他群	15人 18.8%	53人 38.3%	51人 47.7%	119人 35.7%
合計	80人 24.0%	146人 43.8%	117人 32.7%	343人 100.0%

次の（表14）から（表16）にかけては「自己表現意識群」と「学級内交友意識群」とのクロス表である。

このクロスにおいても、対角線上の人数の変化が全学年で見た場合と小学生の場合で近似しており、「自己表現意識が高く、学級内交友意識も高い」グループと「自己表現意識が低く、学級内交友意識も低い」グループの比率は約10：7となる。しかし、中学生については逆に7：10である。3因子のクロス表の中で「中」のグループの人数がもっとも多いのがこのクロス表である。それはP117の（図3）で明らかのように、学級内交友意識群は平均値が高く、5点満点の4点を「中交友意識群」としていることにもよるといえる。

表14 自己表現意識群：学級内交友意識群（全学年）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高自己表現群	37人 50.4%	85人 31.5%	50人 17.1%	172人 30.5%
中自己表現群	97人 33.7%	180人 54.7%	141人 48.3%	418人 46.8%
低自己表現群	38人 14.0%	64人 19.3%	101人 34.8%	203人 22.7%
合計	172人 30.5%	329人 36.8%	292人 32.7%	793人 100.0%

カイ二乗値 95.29809 自由度 4 確率 0.01%

表15 自己表現意識群：学級内交友意識群（小学生）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高自己表現群	63人 55.3%	29人 21.8%	21人 18.3%	113人 25.6%
中自己表現群	59人 25.5%	94人 40.7%	78人 33.3%	231人 52.3%
低自己表現群	14人 10.3%	31人 20.1%	53人 34.9%	98人 22.9%
合計	136人 30.8%	154人 34.8%	152人 34.4%	442人 100.0%

カイ二乗値 58.20448 自由度 4 確率 0.01%

表16 自己表現意識群：学級内交友意識群（中学生）

	高学級内交友群	中学級内交友群	低学級内交友群	合計
高自己表現群	35人 34.0%	28人 19.3%	11人 9.8%	74人 20.7%
中自己表現群	44人 29.7%	84人 49.9%	53人 29.7%	181人 50.8%
低自己表現群	24人 23.3%	33人 22.4%	42人 27.9%	99人 29.0%
合計	103人 28.6%	145人 40.7%	112人 31.1%	360人 100.0%

カイ二乗値 28.92674 自由度 4 確率 0.01%

(表19) 表14-15-16から高自己表現群

高自己表現群	低自己表現群	高自己表現群	低自己表現群
第2象限 (全) 50人(5.6%) (小) 21人(4.8%) (中) 11人(3.1%)	第1象限 (全) 137人(15.4%) (小) 63人(14.4%) (中) 35人(9.7%)	第3象限 (全) 53人(12.0%) (小) 14人(3.2%) (中) 48人(13.3%)	第4象限 (全) 38人(4.3%) (小) 24人(6.7%)

自己の存在感に大きく関わっていると考えられる。(表18の第1象限から)

② 自己表現意識の高い児童・生徒は、学級における交友意識も高く、存在感のある学校生活を送っていると考

えられる。(表19の第1象限から)

③ ①②と逆に、愛他的行動意識や自己表現意識の低い児童・生徒は、学級内における存在感も低いと考えられ、きめ細かな指導・支援が必要と思われる。(表18・19の第3象限から)

④ これらの全体から見て、愛他的行動意識が高く、かつ、自己表現意識の高い者の存在感はとりわけ強く、他の生活領域や関心領域に与える影響も強いものと考えられる。

なお、上の3表において、第1象限に属する児童・生徒については「存在感を示したい」とする意識が強い子ども群であるので、学校生活の中でその存在感を引き出しやすく伸ばしやすくと考えられるが、第3象限に属する児童・生徒は、その逆である。第3象限に属する子どもたちの傾向の背景に何があるのか、学校・家庭・地域の状況を正しく観察・分析して対応することが大切であろう。

ところで、第2・第4象限に属する児童・生徒は相関する2因子のうち、一方の存在意識は高く他方の存在意識は低い子ども群である。これは、不安定な状況にあるとも言えるし、第1象限、第3象限の子ども群のどちらにも近づく(転じる)可能性を秘めているとも言える。この子どもたちが第1象限に近づけば、存在意識の高い子ども群に対していっそうの弾みをつけよい影響を与えることも考えられ、逆に第3象限に近づけば、そこに属する子ども群や学級環境に対して、さらにマイナスの影響を与えることもあり得よう。

ただ、2因子の関連性は強さからして、一方だけの意識が高いという傾向はやや不自然でもある。この子ども群については特に十分な観察を加え、支援の方法について慎重に考えていかなければいけない。

B 存在感を構成する因子の意義

ここでは、2つの主要因子、すなわち「愛他的行動意識群」「自己表現意識群」について、他の5因子との関連

左表(17~19)

ではそれぞれの関係を縦軸と横軸に置き換えて表現した。第1象限には段階5のグループが入り、第3象限には段階1の組合せが入る。第2象限・第4象限はそれぞれ、段階1と5、5と1の組合せである。数字は上段(全)が全学年の人数(%),中段(小)が小学生数,下段(中)が中学生数である。左の3表をもとに改めて考察を加えると、

① 愛他的行動意識が高く、学級内交友意識も高い児童・生徒が多く見られる。学校生活における人間関係意識が高く、それが

(表17) 表8-9-10から高自己表現群

高自己表現群	低自己表現群	高自己表現群	低自己表現群
第2象限 (全) 22人(4.2%) (小) 14人(5.1%) (中) 8人(4.0%)	第1象限 (全) 98人(18.8%) (小) 52人(19.0%) (中) 12人(6.0%)	第3象限 (全) 61人(11.7%) (小) 27人(9.9%) (中) 34人(17.0%)	第4象限 (全) 21人(4.0%) (小) 6人(2.2%) (中) 11人(5.5%)

(表18) 表11-12-13から高自己表現群

高自己表現群	低自己表現群	高自己表現群	低自己表現群
第2象限 (全) 66人(7.8%) (小) 53人(10.3%) (中) 13人(3.9%)	第1象限 (全) 128人(15.1%) (小) 99人(19.1%) (中) 29人(8.7%)	第3象限 (全) 110人(12.9%) (小) 59人(11.4%) (中) 51人(15.3%)	第4象限 (全) 27人(3.2%) (小) 12人(2.3%) (中) 15人(4.5%)

を、それぞれの因子を構成する設問群とのクロス分析によって考察する。このことによって、これまで概要として述べてきた「児童・生徒それぞれが存在感を感じて自己を表現することのできる、あるいは表現しようとする生活領域（関心領域）」が、いっそう明らかとなるであろう。

1. 愛他的行動意識と他領域との関連《学校生活編》

(1) 愛他的行動意識の高いグループは自己表現意識も高く、学級内での存在感も高い

下には自己表現意識群を構成する設問から4設問を選び、愛他的行動意識群との関連を示した。

(表20)では、高愛他群の中で勉強がわかるように「よく努力する」と「少し努力する」の合計が92.3%となり、きわめて高い。他者への支援的な関わりの中で自己の存在を認知しようとする愛他的行動意識群と、一見してなんの関わりも持たないように思われる

(表20) V30「勉強でわからないことがあったら、わかって努力しますか」

	よくする	少しする	あまりしない	まったくしない	わからない
高愛他群	167人 51.2%	134人 41.1%	18人 5.5%	4人 1.2%	3人 0.9%
中愛他群	98人 32.3%	146人 48.2%	41人 13.5%	11人 3.6%	7人 2.3%
低愛他群	46人 29.3%	98人 44.3%	45人 20.4%	27人 12.2%	5人 2.3%

「学習への努力」が、数値の上では緊密な関連を示しているということである。

(表21)

では「よく意見を言える」と「少し言える」の合計が61.7%、(表22)で先生に「よく質問する」と「少しする」の合計が

(表21) V29「クラスの子の顔に覚えて意見を言うことができますか」

	よくできる	少しできる	あまりできない	まったくできない	わからない
高愛他群	89人 27.3%	112人 43.4%	104人 31.9%	12人 3.7%	9人 2.8%
低愛他群	31人 14.0%	52人 23.5%	77人 34.8%	39人 17.6%	22人 10.0%

57.4%となっており、それぞれ、低愛他群との差異は明白である。

(表22) V31「先生の話を聞いてよくわからないことがあったら、先生に質問しますか」

	よくする	ときどきする	あまりしない	まったくしない	わからない
高愛他群	56人 17.2%	131人 40.2%	98人 30.1%	27人 8.3%	14人 4.3%
低愛他群	15人 6.8%	57人 25.8%	81人 36.7%	61人 27.6%	7人 3.2%

この傾向は前3問と多少内容が異なって学習適応意識について問うている傾向の強いV28(表23)においても同様の傾向がはっきりと

(表23) V28「学校の勉強の中で、クラスの子よりも得意なものがありますか」

	たくさんある	少しある	あまりない	まったくない	わからない
高愛他群	44人 13.5%	174人 53.4%	77人 23.6%	12人 3.7%	19人 5.8%
低愛他群	11人 5.0%	94人 42.5%	51人 23.1%	42人 19.0%	23人 10.4%

出ている。

これらのことから、愛他的行動意識と自己表現意識との関連は明らかである。他者への気遣いができる児童・生徒は、学校生活において、積極的に自己を表現する中で、自らの存在感を体感し、自己表現すること

ができると感じている者たちは、よく周囲への気配りも行き届くのであろう。そして、他者(教師を含む)からの評価が良好であろうこともうかがえる。

(2) 愛他的行動意識と学級内交友意識とは密接に関わり、学校生活における人間関係の「存在感」に果たす役割が大きい

先にも述べたように学級内交友意識とは、安定した学級経営という基盤の上に立ってこそ生まれる、協調的行動を中心とした人間関係である。

下の(表24)によると、「はい」の全体が35.9%、「どちらとも」が42.2%、「いいえ」が21.9%という割合となる。特に高愛他群では「はい」が49.1%で「いいえ」は12.3%である。一方、低愛他群ではその傾向が逆転する。

(表24) V03「休み時間、おなかが『おはよう』と声をかけたら、クラスの子は集まっていますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	160人 49.1%	126人 38.7%	40人 12.3%
中愛他群	107人 35.3%	137人 45.2%	59人 19.5%
低愛他群	38人 17.2%	96人 43.4%	87人 39.4%

(表25) V23「遠足の準備を作ることに当たったら、誰か一つ一つの準備を作る友だちはクラスにいますか」

	たくさんいる	少しいる	あまりいない	まったくいない	わからない
高愛他群	203人 62.3%	106人 32.5%	7人 2.1%	2人 0.6%	8人 2.5%
低愛他群	66人 29.9%	110人 49.8%	19人 8.6%	8人 3.6%	18人 8.1%

(表26) V24「宿題の問題が解けなくて困った時、クラスに相談できる友だちはいますか」

	たくさんいる	少しいる	あまりいない	まったくいない	わからない
高愛他群	149人 45.7%	136人 41.7%	20人 6.1%	4人 1.2%	17人 5.2%
低愛他群	38人 17.2%	100人 45.2%	38人 17.2%	22人 10.0%	23人 10.4%

上の(表25)(表26)も顕著な傾向を示し、特に「たくさんいる」において、高愛他群と低愛他群とは「はい」の数値に明らかな差異が見られる。愛他的行動意識と学級内交友意識が密接な関連を持ち、他者に対する援助的な行動力を持つ者は他者との協調的な交友関係も円滑であろう。このような人間関係は学校生活における存在感を支える柱となっているのではなかろうか。

2. 愛他的行動意識と他領域との関連

《家庭・地域生活編》

(1) 学校生活において愛他的行動意識の低い児童生徒は家族関係意識も低い

下表27. 28. 29は回答者が家族からどう見られてい

るかの意識を問うた設問群である。高愛他群の家族関係は良好である。(表27)の高愛他群では75.2%が「家族が心配する」と感じており、「心配していない」と感じている者は11.7%に過ぎない。

一方低愛他群の意識には、自分の帰宅遅れを「家族は心配していない」と感じている者が39.4%もいる。

(表28)(表29)でも多少の強弱はあるものの同様の傾向を示している。他者を思いやり援助的な意識を示す児童・生徒は、学校生活だけでなく家庭内人間関係においても、その愛他的行動意識を示すと言えようし、

(表27) V34 「もしも帰宅時間が遅くなり遅れてしまったら、家族は心配すると思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	245人 75.2%	43人 13.2%	38人 11.7%
低愛他群	89人 40.3%	45人 20.4%	87人 39.4%

(表28) V28 「家族はあなたの意見をよく聞いてくれますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	223人 68.4%	64人 19.6%	39人 12.0%
低愛他群	90人 40.7%	67人 30.3%	64人 29.0%

(表29) V38 「家族はあなたの将来について、よく考えてくれていると思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	204人 62.6%	84人 25.8%	38人 11.7%
低愛他群	92人 41.6%	81人 36.7%	48人 21.7%

低愛他群の「家族からの評価」に対する否定的な(悲観的な)意識は高愛他群と比較して強いと考えられる。(中学生の場合、その発達段階からして、本人の家族意識や家族の本人に対する接し方は、より独立的で自立的な方向に向かっているとの解釈は捨てられないので、否定的・悲観的な解釈のみに偏らせたくはないが。)

これらの数値を「否定的・悲観的」な意識と捉えたとしたら、彼らは、何に存在感を感じ、どこで存在感を求めようとするのだろうか。

(表30)(表31)には回答者から家族への働き掛けを示す設問を上げた。「家族を看病するか」という質問に対し、高愛他群の児童・生徒は87.7%が「はい」と答え、「いいえ」はわずか1.8%である。それに対して低愛他群は「はい」が47.5%、「いいえ」が22.6%となっている。10人に2~3人は病気の家族を看病しないだろうと感じているのである。そういう児童生徒の54.3%が家族からほめられることについて多くないと感じている(表32)。前にも記したように、とりわけ中学生においては、その発達段階からして家族にほめら

(表30) V35 「もし家族が病気でいたら、あなたは看病しますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	286人 87.7%	34人 10.4%	6人 1.8%
低愛他群	105人 47.5%	66人 29.9%	50人 22.6%

(表31) V31 「もし家族に手伝いを頼まれたら、家族のためなら何でも手伝おうと思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	108人 33.1%	143人 43.9%	75人 23.0%
低愛他群	19人 8.6%	82人 37.1%	120人 54.3%

たいと感じない生徒もいるであろうし家族も「大人扱い」するであろう。しかし、家族の看護という点には「ほめられる」という設問とは違うニュアンスが含まれよう。看病するような愛他的な意識が薄いからほめられないのか、それとも、ほめられることも少なく心配されることも少ないから愛他的行動意識が育たないのか。彼らは果たしてどのような学校生活を送っているのだろうか。教師は、このような傾向を持つ児童・生徒の発達段階や親との接し方などを考慮しつつ、観察を深めることが大切であると考えられる。

(表32) V42 「家族からほめられることが多いですか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	110人 33.7%	130人 39.9%	86人 26.4%
低愛他群	26人 11.8%	75人 33.9%	120人 54.3%

なお、小・中別に見ると、「将来について家族は考えてくれているか」という質問に対しては、中学生に肯定的な反応が多い(小学生全体の「はい」54.5%に対して、中学生も53.5%と、差がない)。しかし、「家族にほめられるか」という質問になると小学生全体の33.8%に対し、中学生は11.7%と、きわめて低い数値を示す。大人として扱おうとする家族の期待の大きさか、それとも嘆きの現れか。

表31と表32のそれぞれを対角線で結んだ数値が近似していることや、合計欄の数値がまったく同数であることも興味深い。家族の手伝いをする者としていない者、家族にほめられる者とほめられない者、これはそれぞれ重なるのかも知れない。

表31と表32のそれぞれを対角線で結んだ数値が近似していることや、合計欄の数値がまったく同数であることも興味深い。家族の手伝いをする者としていない者、家族にほめられる者とほめられない者、これはそれぞれ重なるのかも知れない。

(2) 近隣関係意識と愛他的行動意識との関わり
愛他的行動意識の高い児童・生徒は、近隣の大人や子どもたちに対してどのような意識で接しているのだろうか。近隣関係意識群を構成する設問として導き出されたものはV43・V45・V40・V42の4設問のみである。

(表33) V43 「近所の大人からほめられることが多いですか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	138人 42.3%	105人 32.2%	83人 25.5%
低愛他群	38人 17.2%	63人 28.5%	120人 54.3%

ここでは、2つの設問に関する表を示す。

(表33)(表34)で明らかのように、ここでも愛他的行動意識の高さと近隣関係意識の高さは明確に結びつく。「近所の大人からほめられる」経験の多い者は高愛他群で42.3%、低愛他群では17.2%である。逆に「少ない」と答えている者は25.5%対54.3%と、数値がまったく逆転する。

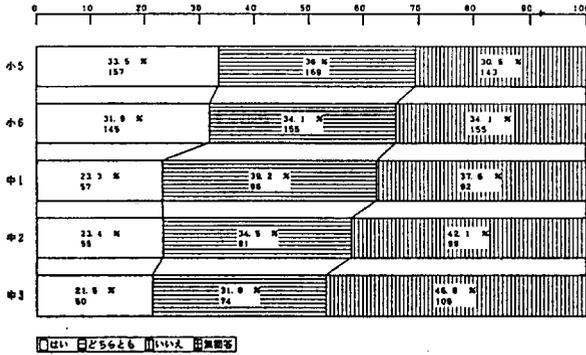
V45の設問「近所の子ども世話をしてあげることがあるか」では愛他的とそうでないグループの差の傾向がV43と近似している。しかし、学年差の構成比グ

(表34) V45 「あなたは近所の子どもを助け
てあげることがありますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	191人 58.6%	37人 11.3%	98人 30.1%
低愛他群	47人 21.3%	33人 14.9%	141人 63.8%

ラフで見ると、小5から中3まで段階的に減少する。中学生にとってはすでに近隣関係が存在しないだろうか。

図13



(3) 愛他的行動意識の高い児童・生徒は地域への関心も高い

児童・生徒の地域社会への関心度は高いとは言えないが、高愛他群の児童・生徒と低愛他群ではその差が歴然としている。

(表35) V46 「地域の活動等を通して、地域の人と知合いたい
と思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	171人 52.5%	80人 24.5%	75人 23.0%
中愛他群	80人 26.4%	94人 31.0%	129人 42.6%
低愛他群	22人 10.0%	51人 23.1%	148人 67.0%

左の(表35)を見ると高愛他群の児童・生徒の52.5%が「はい=地域の人と知合いたい」と答え、23.0%が「いいえ」と答えている。一方、低愛他群で「はい」と答えている者は10.0%に過ぎずそれに対して「いいえ」は67.0%と、きわめて対照的な数値を示す。

学校生活において他者と愛他的で良好な人間関係を持ち、その中で自己の存在を感じている子どもたちは、地域生活においても存在感を發揮し好感を持って地域に受け入れられているのであろうか。ただし、小・中の差は歴然としており、特に低愛他群の中学生の地域の大人への関心は、わずか5.9%である。(小・中表略)

愛他的行動意識の高低は地域の人々との人間関係にとどまらず、地域組織や地域活動への関心にも高い関連性を示している。

下の(表36)では、対象児童生徒850人の41.1%が町内運動会等への参加を「楽しい」と答えているが、特に高愛他群では62.6%が「はい」と答え、低愛他群の20.4%の3倍を越える。

(表36) V54 「町内運動会や町内運動会に参加することは
楽しいことだと思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	204人 62.6%	60人 18.4%	62人 19.0%
低愛他群	45人 20.4%	40人 27.1%	116人 52.5%

また、(表37)でも、「町内会や子ども会活動を大切だと思う」者は、高愛他群が低愛他群の3倍を大きく越えている。

(表37) V58 「学校の勉強だけでなく、町内会や子ども会等の活動も大切だと思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	222人 68.1%	65人 19.9%	39人 12.0%
低愛他群	45人 20.4%	74人 33.5%	102人 46.2%

このように地域活動に対する関心の高い高愛他群に属するグループは(表38)で明らかのように、例え気の合わない子がいても地域活動に参加しようという積極性がうかがえる。

(表38) V51 「同じ活動のグループに気の合わない子がいても、
地域の活動に参加しますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高愛他群	191人 58.6%	71人 21.8%	64人 19.6%
低愛他群	52人 23.5%	56人 25.3%	113人 51.1%

地域生活に関する設問全般でも、男女差、学年差は

あり、女子が高く小学生の高い傾向が目立つ。この違いを鵜呑みにばできないことは先にも述べた。しかし、学年による意識の差は明白であり、中学生にとって地域社会は決して身近なものでないこと、それでも中学生の中で「とても愛他的」な行動意識を持つ者は、やはり地域への関心の高いことがわかった。

これまで、愛他的行動意識群と他因子との関連について述べてきた。学校生活において、愛他的すなわち、支援的な関わりの中で人間関係を重視し、そこに自らの存在を感じ取ろうとする児童・生徒は、他領域においてもきわめて良好な傾向を示すことが明らかになったと考える。

3. 自己表現意識と他領域との関連《学校生活編》

(1) 自己表現意識の高い児童・生徒は学校生活全般に強い存在感を示し愛他的行動意識も高い

自己表現意識と他の因子群に属す各設問との関連は、いずれも高い数値を示す。

ここでは、自己表現意識群と愛他的行動意識群のクロス分析結果について考察する。

自己表現意識の高い児童・生徒は愛動的であり、他者への支援的な生活領域を通して自己の存在を確認しようとする傾向も合わせ持つ。

次表39では「学校を休んだ子がいたら心配する=はい」と答えた生徒が889人中563人、63.8%をしめ「いいえ」は16.2%にとどまる。それが高自己表現群においては73.6%と、さらに高い数値を示し「いい

(表39) V01「クラスで学校を休んだ子供いたら、あなたは『どうしたんだろう』と心配しますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	201人 73.6%	41人 15.0%	31人 11.4%
低自己表現群	105人 53.6%	40人 20.4%	51人 26.0%

(表40) V04「運動会でクラスの子が健忘症で出陣したら、あなたは声をかけますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	258人 94.5%	8人 2.9%	7人 2.6%
低自己表現群	144人 73.5%	25人 12.8%	27人 13.8%

(表41) V32「クラスで仲間外れになったら、つまらなそうしている子供いても、知しませんか」

	全く気にならない	あまり気にならない	少し気にする	とても気にする	わからない
高自己表現群	14人 5.1%	25人 9.2%	152人 55.7%	72人 26.4%	10人 3.7%
低自己表現群	19人 9.7%	42人 21.4%	99人 50.5%	20人 10.2%	16人 8.2%

にする」と「少し気にする」を合わせて、全体の72.1%に上るが、高自己表現群では82.1%となり、低自己表現群の60.7%とは明確な差が出る。

(表) V18「クラスの子に悪いことを言ってしまったと気付いたら、素直に謝れますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	195人 71.4%	60人 22.0%	18人 6.6%
低自己表現群	98人 50.0%	60人 30.6%	38人 19.4%

る他者への素直な反応と言えようが)が高く、興味深い。自己表現力があり、学習適応能力の高い児童・生徒の学校生活における存在感の大きさ、強さを物語るデータの一つであろう。なお、このクロス分析における学年差はほとんど見られなかった。

(2) 自己表現意識と学級内交友意識の関連はどうか

自己の思いを表現し主張することに積極的な児童生徒は、学級内での交友関係においても自己の存在を確かなものとするのであろうか。

(表42) V03「休み時間、あなたが『寂しい』と声をかけたら、クラスの子は来ってきますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	169人 61.9%	69人 25.3%	35人 12.8%
中自己表現群	142人 33.8%	195人 46.4%	83人 19.8%
低自己表現群	46人 23.5%	85人 43.4%	65人 33.2%

い者の「はい」は23.5%と激減し逆に「いいえ」は33.2%と3倍増に近い。この傾向には大きな学年差が

え」は11.4%のみである。(表40)ではさらに顕著であり、「はい＝声援を送る」が全対象数の85.5%と高い中で、高自己表現群の児童・生徒では94.5%となり100%に近い。「いいえ」の数値は意識の高い者が低い者の5分の1以下である。

左表41は反転質問である。クラスに仲間外れがいた時「とても気

にする」と「少し気にする」を合わせて、全体の72.1%に上るが、高自己表現群では82.1%となり、低自己表現群の60.7%とは明確な差が出る。

る他者への素直な反応と言えようが)が高く、興味深い。自己表現力があり、学習適応能力の高い児童・生徒の学校生活における存在感の大きさ、強さを物語るデータの一つであろう。なお、このクロス分析における学年差はほとんど見られなかった。

(2) 自己表現意識と学級内交友意識の関連はどうか

自己の思いを表現し主張することに積極的な児童生徒は、学級内での交友関係においても自己の存在を確かなものとするのであろうか。

(表42) V03「休み時間、あなたが『寂しい』と声をかけたら、クラスの子は来ってきますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	169人 61.9%	69人 25.3%	35人 12.8%
中自己表現群	142人 33.8%	195人 46.4%	83人 19.8%
低自己表現群	46人 23.5%	85人 43.4%	65人 33.2%

い者の「はい」は23.5%と激減し逆に「いいえ」は33.2%と3倍増に近い。この傾向には大きな学年差が

なかった。自己表現意識が高く、考えたことやわからないことをしっかりと表現できる者は、交友関係にも自信を持ち自己の存在の有り様をいっそう確かなものにしていてと考えられる。

(表43) V06「休み時間に、教室や校庭で一人ぼっちで過ごすこと嫌いですか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	45人 16.5%	12人 4.4%	216人 79.1%
低自己表現群	38人 19.4%	24人 12.2%	134人 68.4%

で過ごす児童・生徒の割合の差は僅少である。

下表44では自己表現意識の高い者の「一緒に班を作る友がたくさんいる＋少しいる」の合計が96.3%であり、「あまり＋まったく」の合計が2.6%であるのに対し、表現意識の低い者の%はそれぞれ75.0%と13.8%である。また、(表45)を同様に見てみると、自己表現意識の高い者は95.6%が「本を見せてくれる」と答え、「見せてもらえない」と感じている者が2.2%に過ぎないのに対し、

(表44) V23「遊びの班を作ることになったら、取っ合って一緒に遊べる班はどのくらいありますか」

	たくさんある	外いる	あまりない	まったくない	わからない
高自己表現群	202人 74.0%	61人 22.3%	4人 1.5%	3人 1.1%	3人 1.1%
低自己表現群	62人 31.6%	85人 43.4%	22人 11.2%	7人 3.6%	20人 10.2%

(表45) V25「もし班活動が始ってから班幹部に選ばれたことと気が付いたら、見せてくれる班友がどのくらいいますか」

	たくさんある	外いる	あまりない	まったくない	わからない
高自己表現群	191人 70.0%	70人 25.6%	5人 1.8%	1人 0.4%	6人 2.2%
低自己表現群	57人 29.1%	82人 41.8%	18人 9.2%	13人 6.6%	26人 13.3%

低い者ではその割合がそれぞれ70.9%と19.9%になる。自己表現意識の低い者は学級内交友に自信を持ってず、その存在感も弱いと思われる。

(3) 技能教科意識群も自己表現意識群との関連が深い
 詳細は省略するが、自己表現意識群と技能教科意識群との関連も、他因子との関連と同様であった。

- ① V08「体育の時間にいろいろな運動を進んでやりたいと思いますか」という問いに高自己表現群の74.7%が「はい」と答えているが、低自己表現群の「はい」は38.8%に止まる。
- ② V10「図工の時間、かなづちや彫刻などの道具を上手に使えますか」という問いに対しては高自己表現群の54.9%が「はい」と答え、低自己表現群の「はい」は20.4%に過ぎない。
- ③ V11「クラスのほかの子がなかなかできない運動でも、簡単にできてしまうことがありますか」という設問に対する反応はさらに顕著であり、高自己表現群は47.6%、低自己表現群が12.2%と約4倍の差になる。

これまで、「勉強は苦手どもスポーツは得意」というタイプの児童生徒がかなり存在すると考えていたが、いわゆる「文武両道」型の子どもの方が多いと思われ、人間関係の適応状況や学習適応状況の良・不良が子どもたちの存在感に与える影響は大変に大きいと感じるのである。

いずれにしても、自己表現意識をどう高めていくかが、児童生徒の学校生活における存在感の広がり、大きな影響を与えるであろう。

4. 自己表現意識と他領域との関連

《家庭生活・地域生活編》

ここでは自己表現意識群と、家庭・地域生活領域の中で導き出された3因子との関連を考察する。

(1) 自己表現意識が高いほど家族関係意識も高く家族との人間関係も良好である

(表46) V34「もし暑が熱てしまったら、
家族に心配すると思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	187人 68.5%	40人 14.7%	46人 16.8%
低自己表現群	91人 46.4%	39人 19.9%	66人 33.7%

「はい＝家族は心配する」と答えているのに対して、低自己表現群で「はい」と答えているのは46.4%と落ち込むが、「いいえ＝心配しない」は16.7%から33.7%と倍増する。

(表47) V35「もし家族が病気をしたら、あなたは看病しますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	223人 81.7%	33人 12.1%	17人 6.2%
低自己表現群	118人 60.2%	52人 26.5%	26人 13.3%

看病する」81.7%に対して、低自己表現群は60.2%となり、明らかに低い数値を示す。これらの数値が学年が上がるに比例して「はい」はマイナス傾向を示し、「いいえ」がプラスに転じるのも予想通りであった。また、女子が男子に比べて良好な傾向を示すことも予想された通りであった。

男女の差に関しては、先に述べた学校生活領域の各因子においても、概ね女子が高い数値を示す。あらゆる生活領域に対する女子の積極性・主体性が目立つ。女子の規範意識の高さに加え、女子の存在を支えている社会的・時代的な背景もうかがえる。

前述の(表46)では低自己表現群の「いいえ＝家族は自分の帰宅時間遅れを心配しない」の33.7%が目についた。自己表現意識の低い児童・生徒の中に「どう

せ僕は、私は」というような陰はないだろうか。「心配しない」が、家族の信頼や自立への期待の現れであるのならよいのだが、表48でも、また表49でも高自己表現

(表48) V37「家族はあなたの話をよく聞いてくれますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	195人 71.4%	52人 19.0%	26人 9.5%
低自己表現群	86人 43.9%	55人 28.1%	55人 28.1%

(表49) V38「家族はあなたの将来について、よく考えてくれていると思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	191人 70.0%	67人 24.5%	15人 5.5%
低自己表現群	78人 39.8%	78人 39.8%	40人 20.4%

(表50) V26「雑からほめられることが多いですか」

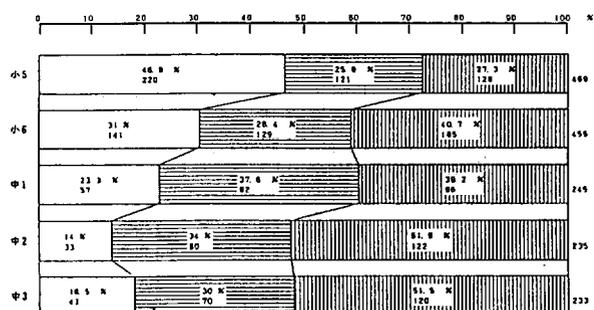
	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	128人 46.9%	98人 35.9%	47人 17.2%
低自己表現群	22人 11.2%	60人 30.6%	114人 58.2%

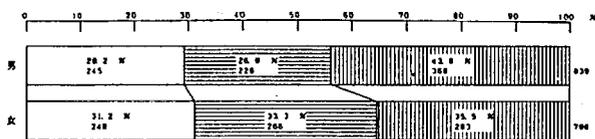
現群と低自己表現群の「はい」の差は歴然としている。そして、「いいえ」についても低自己表現群が約3～4倍に増えている。この傾向がさらに増すのが(表50)である。学校生活では、ほめられることが「よくある」と「ときどきある」を合わせて42.3%、家族にはめられるのは24.6%である。その中で自己表現意識の強い児童・生徒は46.9%がよくほめられると感じている。一方自己表現意識の弱い者では11.2%に過ぎない。4倍強の差異がある。学校生活における自己表現(自己主張)意識の高さが、家族関係意識にまで投影されると見るのは早計だろうか。自己表現意識が高まり、学習適応が進む中で他の領域にも好影響をもたらすのだろうか。自己表現意識が高く、学習適応能力の高い児童・生徒には、他の領域に対する適応力といったようなものが備わっているのだろうか。

(2) 自己表現意識の高さは地域生活への関心の高さと結びつくのか？

① まず、地域の大人たちとの関連について、クロス集計を交えて見てみよう。

表51-1 V46「地域の活動などを通して、地域の人たちと知合いたいと思いますか」





(表51-2)

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	118人 43.2%	77人 28.2%	78人 28.6%
中自己表現群	127人 30.2%	116人 27.6%	177人 42.1%
低自己表現群	35人 17.9%	58人 29.6%	103人 52.6%

上記51-1と左表51-

2では性別による違いは僅少だが、学年差は明らかである。その中で、学年が進むに従って急激に減少する地域への関心が、中3で若

干ながら盛り返している点は興味深い。そして、高自己表現群では「はい＝地域の大人と知り合いたい」が43.2%と肯定的であるのに対して、低自己表現群はここでも17.9%と落ち込んでいる。逆に否定的な反応は28.6%から52.6%へと倍増に近い。

自己表現意識が高いということは、様々な分野への興味・関心が高く、積極的に取り組むということであろう。一方で自己表現意識が低い者は様々な状況の中で取り残される可能性がある。存在感に与える影響も大きいと思われ、これを「当然のこと」と捉えてはならない。

(表52) V47「子供等の成長を導いて、自分もそのよう大人になりたいと思うことがありますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	72人 26.4%	84人 30.8%	117人 42.9%
低自己表現群	23人 11.7%	55人 28.1%	118人 60.2%

左表V47の設問では性別や学年別による変化は特に見られなかった。中2がやや落

ち込む程度である。

しかし、自己表現意識との関連でいうと、「はい」は高自己表現群から低自己表現群に向かって半減し、逆に「いいえ」は42.9%から60.2%へと大きく増える。

② 地域での活動(町内会・子ども会活動など)との関連はどうか。

(表53) V53「町内会で多くの親の活躍を促すことになったら、参加しますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	120人 44.0%	71人 26.0%	82人 30.0%
低自己表現群	42人 21.4%	58人 29.6%	96人 49.0%

(表54) V54「親子運動会や町内運動会に参加することに親が参加したいと思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	146人 53.5%	51人 18.7%	76人 27.8%
低自己表現群	60人 30.6%	47人 24.0%	89人 45.4%

3表それぞれの合計覧を見ると表53・表54では「はい」が「いいえ」を上回っている。これは低学年に肯定波が多いことに起因する(性別では女

(表55) V58「学校の勉強だけでなく、町内会や子ども会などの活動も大切だと思いますか」

	はい	どちらとも	いいえ
高自己表現群	163人 59.7%	52人 19.0%	58人 21.2%
低自己表現群	57人 29.1%	71人 36.2%	68人 34.7%

子がやや高い)。自己表現意識との関係では、やはり明らかに高自己表現群の方が地域への関心が高く、地域生活の領域でも存在

感を感じる割合が高いと言える。学校生活における自己表現(自己主張)意識が、この因子に内包されている学習適応意識とあいまって、他の諸領域と密接に結びつくことを、改めて確認したのである。

IV 研究のまとめと課題

本研究会議では仮設に基づいて、学校生活・家庭生活・地域生活・学習塾や習いごとの4生活領域を設定し、子どもたちの意識と実態を調査した。

そして、学校生活に関する4因子と、家庭・地域生活に関する3因子を抽出することができた。

○学校生活に関する4因子

- ① 愛他的行動意識群
- ② 自己表現意識群
- ③ 学級内交友意識群
- ④ 技能教科意識群

○家庭や地域生活に関する3因子

- ⑤ 家族関係意識群
- ⑥ 近隣関係意識群
- ⑦ 地域存在意識群

の7因子であり、この中に子どもたちの存在の場があるのではないかと考えた。特に、愛他的行動意識と自己表現意識が主要な因子であると考え、この2因子を尺度得点化して、他因子との関連を求めた。

その結果、愛他的行動意識・自己表現意識の高い児童・生徒が、学校内で良好な人間関係を保ち、生活場面や学習場面でも存在感のある活動を展開しているのではないかと考えるに至った。

また、愛他的行動意識・自己表現意識の高い子どもたちは、家庭における家族関係、近隣の大人や子どもたちとの関係も良好であり、地域社会との関係や地域社会への関心などが高いことを知った。全般的には小学生や女子が、中学生や男子に比較して自己存在の場をより強く得ていることもわかった。

一方で、愛他的行動意識が低く、自己表現意識の低い子どもたちが、学校生活場面や家庭生活場面でのように存在感を得て活動しているのかを考えると、心配な面もある。級友たちと愛他的(援助的)に接することができず、また、学級内で十分に自己表現(自己主張)できない子どもたちの、家族関係や地域存在関心がきわめて低いことも気掛かりである。また、高愛他群ではあるが低自己表現群であったり低交友意識群である子ども群、そして、高自己表現群ではあるが低交友意識群に属する

子ども群の存在をどう生かしていくかが一つのポイントとなるようにも考えられる。この、いわゆる「第2・第4象限の子どもたち」はどちらにも転化し得るし、どちらにも影響を与え得る可能性を持ち、ある意味では「矛盾をはらんだ子ども群」とも言えよう。学級経営をすすめる上で、あるいは、子どもたちの学校生活に存在感をもたらす上で、大切な鍵を握るものと考えられる。

学級内交友意識については、安定した学級経営基盤の下に良好な傾向を示すことが明らかである。こうした点も踏まえ、日常の児童・生徒指導に対しいっそうの配慮を持って取り組むことが肝要であろう。

小学生と比較すると、中学生の地域活動や近隣関係への関心度はかなり低い。しかし、地域によってはいくつかの課題をクリアーすることによって、中学生がリーダーとして育っている実践例も見られる。

今回の意識実態調査と、その分析・考察を進める中で私たち研究会議のメンバーは、改めて学校教育の果たすべき役割の大きさ・重さを知るに至った。愛他的行動意識・自己表現意識に内在する子どもたちの存在感の有り様と、他の生活領域や人間関係との関連を十分に認識して、指導・支援にいっそうの工夫をしなければならないと考えるのである。

今回は紙面の都合で掲載できなかったが、「学習塾・習いごと塾」と上記主要因子との関連も興味深い。(「別冊資料」を参照されたい。)

今後、各因子のクロス分析等から導き出された「子ども像＝タイプ」を手がかりに、教師が児童・生徒の観察をさらに深める中で、どのタイプにはどのような指導が有効なのかを考え、実践していければ……とも、考えるのである。(一部、別冊資料に添付)

おわりに

テーマの設定、研究の方法、調査用紙の作成、集計結果のコンピュータ分析……それらの一つ一つが、文字通り暗中模索の中で行われた。課題山積の難路を幾度往復したことだろう。調査にご協力いただいた先生方、児童・生徒の皆さん、そして、研究者としての姿勢を身をもってお示しいただき、熱心なご指導をいただいた横浜国立大学の岡田守弘教授を初めとする指導助言者の先生方に心から感謝申し上げます。

今回得られたデータを、学校現場はもとより、家庭・地域・社会教育現場等に広く問う中で、学校と家庭・地域との相互連携の在り方、子どもたちへの支援の在り方を共に考えていきたいと思う。

・先行研究

川崎市青少年問題調査研究委員会「川崎市の小・中学生

の生活と意識についての調査」 1982年
川崎市留守家庭児問題研究協議会「川崎市の児童の校外生活と留守家庭児事業（学童保育）に関する調査報告」 1985年
川崎市教育委員会「学校週5日制に向けての小・中学生の行動に関する調査報告書」 1992年
川崎市総合教育センター学校経営研究会議「新しい教育の動きに伴う学校経営についての研究」 1993年

・参考文献

森 隆夫著「生涯教育と学校教育」 教育開発研究所 1974年
岡本 包治著「教師のための社会教育入門」 ぎょうせい 1979年
島田 修一著「地域を創る社会教育実践」 エイデル研究所 1985年
ロロ メイ著「存在の発見」 誠信書房 1986年
辻 新六・有馬 昌宏著「アンケート調査の方法」 朝倉書店 1987年
篠原 一・牧証名編「地域からの教育改革」 自治体研究センター 1987年
岡本 包治著「青少年の地域参加」 ぎょうせい 1989年
梶原 康史著「豊かな教育活動と生徒指導」 日本教育新聞社 1989年
湯上 二郎著「生涯学習体系の構築へ向けて」 学文社 1990年
川崎市生涯学習推進基本構想策定調査委員会著「川崎市生涯学習推進基本構想」 川崎市教育委員会 1991年
渡部 洋編著「多変量解析法入門」 福村出版 1992年
岩井 勇児著「児童生徒理解の統計法」 福村出版 1992年
森山 定雄著「生涯学習と地域教育改革」 川崎教育文化研究所 1993年

・指導助言者

横浜国立大学教授 岡田 守弘
(川崎市総合教育センター専門員)
玉川大学講師 小川 信夫
(川崎市総合教育センター専門員)
川崎市立小倉小学校校長 青木 京子
(市校長会児童指導対策委員会前委員長)
川崎市立南加瀬小学校校長 田中 久春
(市児童指導研究会前会長)
川崎市立富士見中学校校長 塚本 忠夫
(市生徒指導部会前会長)
川崎市立渡田中学校校長 大富 康
(市生徒指導部会会長)